

Rakuichi

金屋町楽市 in さまのこ 芸術文化学部地域連携プロジェクト

富山大学芸術文化学部教授 武山 良三



■「日常の美」をテーマとした展示方法の開拓

高岡鋳物発祥の町である金屋町一帯を美術館に見立てた「金屋町楽市inさまのこ（以下 楽市）」の平成26年度テーマは、「日常の美」としました。楽市ではこれまで、工芸が本来あるべき魅力を発揮する上で、それが置かれる背景との関係が重要ではないかと考え、畳や塗り壁、障子や木柱など自然材が用いられた伝統的な町屋での展示を行ってきました。平成26年度は、そこに置かれている家具とコーディネートした什器を組み合わせることで、日常性を一層重視した展示を行いました。町屋にある座敷机を活用、これに組み合わせて高さを出した展示台や、長押に掛けた柱形の展示棚は、説明を受けなければ元々その町屋にあったかのように感じられるほど馴染ませることができ、その事により展示物や町屋のしつらえが自然に目に入るようにすることができました（写真右）。楽市には、毎年のように来場する方もありますが、「展示や町屋の風情が例年以上に味わえるようになった」との来街者評価がありました。

■展示の核となった大郷コレクション

楽市では毎年目玉となる特別展示を実施していますが、今年は金森藤平家において、学部への寄贈に向けて準備が進められている「大郷コレクション」から選りすぐりの作品を展示しました。大郷コレクションは、古流華道家・大郷理明（おおごうりめい）氏が作品制作のために長年にわたって収集してきた花器を主体としたコレクションです。出身地が富山であること、大半が銅鋳物であることから、高岡にある本学部への寄贈の申し出がありました。本学部では、工芸史を専門とする大熊敏之教授を室長とする「工芸史・工芸技術史研究室」を設置し、収蔵用棚等を整備して受け入れ作業を進めています。寄贈点数は311点、金属製花器が222点と大半を占めますが、漆、木、竹、陶器、七宝なども含まれています。作品のデータ整理を行い、将来的には美術館等への貸し出しも含め、工芸の作品制作及び研究を推進する共有財産として活用していくことを構想しています。

楽市では、その中から30点を公開しました。高岡の金工・定塚義正の「唐子脚巾着型薄端（からこあしきんちゃくがたうすばた）」は、繁栄の象徴である子供が3人で支えるデザインがハレの場にふさわしく、胴部には緻密な文様が入っています。「栄螺脚鮑型水盤（さざえあしあわびがたすいばん）」（作者不詳）は、脚がサザエ、本体はアワビで上部にはヤドカリがあしらわれている他、リアルなバツタが取り付けられた寸胴型花入れなど、遊び心が溢れる中に、高い技術力が光る作品を選定しました。

町屋は天井が高く奥行きがあったことから、花器を山に見立て、全体として蓬莱山をイメージした配置を行いました。一部には大郷氏自身が生け花を添えました（写真中央）。地元新聞社が作品解説記事を連載したことから、県内各地からの来場者がありました。会場では、展示を担当した学生が説明を行いました、アンケートなどを通して、この解説が何よりのおもてなしとなったことがわかりました。

■楽市を支えた「プロジェクト授業」

大郷コレクションをはじめ、工芸作品の展示については大熊教授の指導を受けて文化マネジメントコースとデザイン情報コースの学生が作品整理から、展示、さらには片付け・収納までを行いました。前述の展示什器の制作や空間デザインについては、渡邊雅志准教授、横山天心講師の指導を受け、建築系・工芸系の学生が現場調査からデザイン、製作、設置、解体搬出までを行いました。筆者は、パンフレットや会場の案内サイン、和服を楽しむイベント「きもの通り」、お茶会、でんでん太鼓制作ワークショップなどを担当しました。

学生達は、地域と連携したプロジェクトを実施していく中で、それぞれの専門に関わるテーマを見だし、実践的に学ぶことができます。楽市では従来から学生参加による取り組みを行っていましたが、それらはあくまで自主的な活動に留まっていました。今年度は「プロジェクト授業（註1）」として授業化することで、学生はより



高いモチベーションで取り組みました。

屋内外の展示什器の開発は、授業化したことのひとつの成果となりました。屋外では従来のアルミ製什器の課題となっていた設置の簡便性を大幅に向上させました。このことにより会場の交通規制期間を5日間から3日間に短縮することができました。

■楽市を日常に展開することをテーマとしたフォーラム

大郷氏には特別展示の他に、記念フォーラムの講師をお願いしました。もう1名の講師として、楽市で開催している茶会のひとつ「かわいい茶会 Nomadic 03」で作品展示すると共に自らお手前を披露された下尾さおり氏（Shimoo Design）をお願いしました。テーマは、楽市のようなイベントの成果を日常生活に定着させられるよう「非日常から日常へ」としました。コーディネーターの大熊教授から、まず「工芸とは何か」について簡単な解説があり、平安時代につくられたという焼き物を事例に「いれる」「ためる」「しまっておく」という器、これが工芸の一つの本質であるとの説明がありました。

続いて大郷氏からは、器には「真」、「行」、「草」の格付けがあることが紹介されました。形として、前者から「寸胴・壺」、「薄端（うすばた）」、「水盤」となり、「寸胴・壺」が最も格が高いとされています。形状だけでなく、素材にも「真」、「行」、「草」があり、「金属製」、「磁器・陶器」、「竹器・木地」の順になります。金属製の寸胴は、最も格が高く「極真」と呼ばれます。

下尾氏は自身が制作した家具をスライドを用いて紹介されましたが、それらが床の間や違い棚の役割を担っているとの評価があり、器が間を入れ込む、あるいはそれを受け止める、囲い込むと話は発展しました。

テーマのキーワード「非日常」と「日常」は「ハレ」と「ケ」という概念と合わせて議論され、器のつくり手とつかい手の考え方が合わさって、そのバランスが決まるとの意見が出されました。（写真左）

註1：平成26年度から、芸術文化学部で制度化された授業。「特定の課題を挙げて、問題発見及び解決までの過程、手法を実践的に学ぶ授業」と定義づけられています。申請が教務委員会で認められると授業時間割に入れることが難しい学外の開講でも単位が認められます。楽市は「地域プロジェクト授業（楽市）実習」として開講、42名の履修者がありました。

●記念フォーラム：「非日常から日常へ」

実施日：平成26年9月20日（土）
午後6時30分～午後8時
実施会場：宗泉寺
出演者：大郷理明（華道家「心の花」主宰）
下尾さおり
（家具職人・デザイナー Shimoo Design）
大熊敏之（富山大学芸術文化学部教授）
参加者：約100人

●町並み美術館（工芸品の展示販売）

実施日：平成26年9月20日（土）、21日（日）
午前10時～午後6時（21日は午後5時）
実施会場：メイン会場：高岡市金屋町石畳通り周辺
通行量調査：2日間で約25,000人
出展者：95名

●コンペティション「第5回金屋町賞」

対象者：18歳～35歳の作家21人
審査員：大藤昌宏、武山良三、古池嘉和、渡邊雅志、横山天心、野田雄一、嶋安夫、高川昭良
審査結果：金屋町楽市大賞：武蔵川裕美（漆芸）
金屋町楽市賞：廣瀬絵美（ガラス）
金屋町楽市賞：中島ゆり恵（金工）
金屋町審査員特別賞：
日本大学生産工学部創生デザイン学科三井研究室
熊谷正徳、島田英里子、菅野さやか（紙）
金屋町審査員特別賞：中荒江道子（陶器）